

図書だより

第56号
平成26年2月24日
呉工業高等専門学校
図書館
<http://wwwlib.kure-nct.ac.jp>



大谷川で佇む水鳥 (撮影：呉高専機械工学科5年 高倉 諒)

目次

・ 巻頭文 「読書」とは	図書館長 笠井 聖二	2
・ 平成25年度校内読書感想文コンクールの表彰式		3
・ 第10回校内読書感想文コンクール		
最優秀賞		
夢とはどうあるべきか —「下町ロケット」を読んで—	M1 木村 優介	4
本当のしあわせとは何か —「鼻」を読んで—	E1 山辺 真作志	5
「夏の庭 — The Friends —」を読んで —「死」とは何なのか—	A2 澤田 勇志	6
所有から共有に変化しつつある情報	E3 作田 安希忠	7
有意義に過ごすということ	E5 西村 貴之	8
優秀賞		
1年生の部	M 市川 将 E 角中 大志 C 角 有紗 A 下雅意 彩加	9
2年生の部	M 池内 翔馬 E 栗栖 裕紀 E 佐野 智哉 C 垣内 美月	13
	C 幸 風助 A 高田 侑奈 A 寺延 翼 A 吉本 菜那	
3年生の部	M 峠之内 和也 E 難波 佳那 C 岡部 知里 A 花谷 知紀	21
4・5年生の部	E 都田 智大 E 山本 悠樹 C 惣中 英章	25
講評		28
・ 行事報告 平成25年度第2回ブックハンティング	学生会 文化環境副委員長 堀 雄貴	29
	ブックハンティング図書紹介	
・ 読書のすすめ		
私の人生を決めた一冊の本との出会い	機械工学分野 國安 美子	31
・ お知らせ 貸出回数上位ベスト10、DVD利用回数ランキング	図書館	32
・ 編集後記		

巻頭文

「読書」とは

図書館長 笠井 聖二

今回の図書だよりには「校内読書感想文コンクール」の結果を載せています。そこで、少し「読書」について考えてみたいと思います。「読書とは何か」を国語の先生に聞けば、的確な説明が返ってくるでしょうが、ここでは、「皆さんの読書」や「校内読書感想文コンクール」へのエールとして、私見を書きたいと思います。

「読書」とは「本を読むこと」ですが、「読む」ということは「文字を追う」、「内容を知る」、そして、「そこから考える」という3つが一体になったものだと思います。

「音読」では、声に出して文字をしっかりと音に変えることが大切です。このときは、文字一つひとつの表面上の事実を大切にしておき、文字の媒体・データとしての性質を強く意識した「読む」となっています。「データの読み取り」や「数を読む」という場合も、同様です。このときは、他の2つはそれほど重要ではありません。

「読む」は、「内容を知る」ことでもあります。媒体としての本に「何が書いてあるか」を理解することです。勉強で本を「読む」場合は、これがほとんどですし、一般に、「読む」といった時には、この「内容を知る」ことを指しているといってもよいでしょう。そして、国語的には「読む」の意味はここまでかもしれませんが、私は、「考える」を加えたいと思います。

「読む」にも「考える」を含んでいると言われるかもしれませんが。「相手の手を読む」・「グラフを読む」という場合には、確かに「考える」という行為が入っています。また、本を読んで内容を解釈するためには、いろいろと考えると思います。内容を知る段階の「読む」にも「考える」を含んでいますが、私が言いたい「考える」とは違います。

ここでいう「知る」と「考える」の大きな違いは、行為がどこに向けられているかです。「知る」という行為では、自分以外の対象が必ず存在しますが、「考える」では、他は関係ありません。自分が主体であり、他に関係なく自分だけの行為なのです。「読む」ことは、本やその著者を理解することだけではなく、それらに触発され、場合によっては、それらを超越して、自分自身が自由に思いめぐらせることでもあるのです。私は、「読書」で、この「考える」を大切にしてもらいたいと思います。

娯楽としての「読書」だけではなく、「考える」ことを含んだ知的行為としての「読書」も大いに経験してほしいのです。そして、「校内読書感想文コンクール」は、この知的行為としての「読書」に対するものです。そのため、読書感想文では「知る」・「考える」の両方が必要です。そして、それを伝えるために「表す」ことも必要になります。

1から3年生では、「読書感想文」が夏休みの宿題になっています。単に宿題をこなすのではなく、「読む・考える・書く」という3つを意識して取り組んでみてください。よい作品になるとともに、今後の学習にも役立つと思います。自由応募の4年生以上では、応募が少ないのが現状です。知的な遊びとして、積極的に読書感想文に取り組んでみてはどうでしょうか。

平成25年度 校内読書感想文コンクールの表彰式

平成25年度校内読書感想文コンクールの最優秀賞の表彰式を、校長室でおこないました。最優秀は、以下の通りです。

1年 機械工学科	木村 優介
1年 電気情報工学科	山辺 真作志
2年 建築学科	澤田 勇志
3年 電気情報工学科	作田 安希忠
5年 電気情報工学科	西村 貴之

読書感想文コンクールは、毎年図書館主催で実施しており、今年で第10回になります。学生は、

- 1年生：課題図書（芥川賞・直木賞受賞作等）
- 2年生：課題図書
- 3年生：ノンフィクションなど政治経済に関する本
- 4年生以上：自由

と、指定された本を読み、夏休み中に感想文をまとめて応募します。選考は、本校教員がおこないますが、学年によっては、名前を伏せた上で学生の感想を聞くという、学生による評価もおこなっています。

最優秀賞の受賞は、前回は男子学生が1名だけでしたが、今回は、すべて男子学生という結果になりました。特に4年生以上では、女子学生の応募がなかったのは残念です。次回に、期待したいと思います。



第10回 校内読書感想文コンクール最優秀賞

1年生の部

下町ロケット

池井戸潤 著

機械工学科 木村 優介

夢とはどうあるべきか

―「下町ロケット」を読んで―

この物語は、元ロケットエンジン研究者、佃航平が自分の開発した新型水素エンジンの故障によって、ロケット打ち上げが失敗してしまった責任をとって研究所を辞めた後、佃製作所という父親の町工場を継いだところから始まるビジネス小説だ。佃製作所が持つ特許をめぐって大手企業が織り成すさまざまな策略の中、佃社長と社員が力を合わせて乗り切ってゆく姿が見所となっている作品だ。しかし、私はあえて佃の夢をかなえてゆく姿に着目したい。佃が自分が作ったエンジンでロケットを飛ばすという長年の夢を追いかける姿に、とても感動させられる場面がたくさんあったからだ。

数多くある場面の中でも、とりわけ私が感動したのは、『「ただいま、衛星の正常分離信号を確認しました。」「うおっしゃーっ！」「江原が喜びを爆発させ、殿村は、らしからぬガッツポーズをしてみせた。』という佃が長年の夢を叶えた瞬間の場面だ。この場面を読んだ瞬間、私はまるで佃製作所の一員として今、そこにいるかのような感動を覚え、熱い思いが込み上げてきた。新水素エンジン『セイレーン』の失敗、京浜マシナリ―からの一方的な契約解除による資金難、ナカシマ工業による理不尽な

訴訟、帝国重工による圧力、さまざまな苦難を乗り越えたすえにやっと佃が自分が作ったエンジンで、ロケットを飛ばすという夢を叶えることができた瞬間、そう思うと自然と感動した。

私は、小さい頃から大型機械が好きだった。今回この本を選んだのもこの本の題名が「下町ロケット」であったことから、きつと中小企業がロケットを開発する話なのではないかと思っただけだ。しかし、その期待はいい意味で裏切られた。

この物語は、単にロケット開発の話ではなくもつと奥の深い、夢について改めて考えさせられる、そういった物語であった。組織が大きいからと安住するのではなく、小さいからこの程度と限界を作るのではなく自分自身はどうあるか、夢や生きがいの大切さ、そこを読み手に問い掛けている物語であった。

佃が話した名言の中にこんなものがある。「仕事って言うのは二階建ての家のようなものだと思ふ。一階部分は、飯を食うためだ。必要な金を稼ぎ生活していくために働く。だけど、それじゃあ窮屈だ。だから、仕事には夢が無きやならないと思ふ。それが二階だ。夢だけ追っかけても飯は食えないし、飯だけ食えても夢がなきゃつまらない。」

これは、佃が夢より目先の利益を優先させようとする若手社員を前にした時言った言葉だ。佃製作所の経営者としては、社員の給与を上げてやりたい、何より利益が欲しい。しかし、一人の人間としては自分の夢を叶えたい。佃の悲痛の思いがこの言葉にこめられている。

佃ほどの大きな夢ではないが、私にも小学生の頃からの夢があった。呉工業高等専門学校に入るといふ夢である。この夢は小学四年生の頃、たまたまあるテレビ番組を見て生まれた夢だ。その番組とはNHKで放送されていたロボットコンテストだ。私はこの番組を見て高専に興味を持ち、自分もこんな学校に行ってみたいと思った。そして、佃のように私も多くの試練を乗り越えてきた。自分の成績と高専のレベルとの落差、模試の点数、難しい入学試験の問題、佃さんほどではないにしろ私も多くの苦難を乗り越えた。そして、今年の春ついにその夢を叶えた。だからこそ、佃が自分の夢を叶えた時まるで自分が夢を叶えた時、自分と重なりとてもうれしくなった。

夢を叶けてあきらめない佃には勇気を与えられた。これからは私も夢に向かって、佃のようにくじけることなく自分の夢をつかむ、そんな人間になれるよう努力していきたい。

鼻

芥川龍之介 著

電気情報工学科 山辺 真作志

本当のしあわせとは何か

—「鼻」を読んで—

長い鼻の劣等感が自尊心を傷つけ、鼻を短くしたいと内供は思った。鼻を短くするために様々な方法を試し、鼻を茹でて人に踏ませる方法で短くなった。苦悩を切り抜けることができると、再び他人を不幸に陥れて、優越感に浸ろうとする周りの人たちの嘲笑により、屈辱感のような新たな苦悩をかかえ始めた。結局、鼻は元の長い鼻に戻ってしまったが、今度は内供自身が晴々とした気分になれた。つまり、内供の外的要因は何も変わらないのに、一巡してしあわせになったのは、内供の心の中が変わったからだ。長い鼻と短い鼻の両方を経験してみても、「自分にとっては長い鼻の方がましだ」とわかったのだ。わかったと勝手に劣等感は消え、晴々とした気分になったのである。

人間は身体的特徴に劣等感をもって自尊心が傷つき苦しんだとき、それをみんなと同じように改善して悩みを解決できるのか、そのことを通して本当のしあわせとは何かを問いかけるのが、本作品のテーマである。

自分の身体的特徴が他人に不快感を与えないかぎり現状に寄り添えばいいのである。それをみんなと比較して劣等感を感じ自尊心が傷つき改善してしまうと、かえって周りは違和感を感じて過剰に意識して、また以前の優越感を失ったこと

などで嘲笑するのである。

劣等感とは、他人と比較して劣っていると感じることである。そもそも他人と比較しなければ、劣っているとも感じないし、苦悩することもない。しかし、人間は比較する動物である。それに、しあわせとは比較して感じるものである。「くよりまし」という風に、誰かや何かや自分の過去と比較して、人間は今のしあわせを感じるのである。

また、人間は理想と現実のギャップに苦悩する。だから、そのギャップを解消すれば、苦悩も解消できるはずだ。具体的には、現実を理想に近づけるか、理想を現実にならざるかすればよい。まずは前者の努力をしてみても、それで上手くいかなければ、後者のように現実を受け入れ寄り添えばよい。

劣等感が自尊心を傷つけ、優越感が自尊心を満足させる。劣等感があるとき、「普通」を目指す。「普通」とはいつたいなんだろう。「普通」とは平均的なことである。周りみんなの鼻が長ければ、内供の長い鼻は普通で劣等感も優越感も感じないはずだ。無人島でひとり生きていても同じである。周りと同じか、比較する対象が周りにいなければ、人間は劣等感も優越感も感じない。「普通」とか「人並み」とかはいい加減なものである。結局、自分がどうあるかよりも、周りがどうあるかで、人間は悩むのである。周りと同じか違うか。周りよりも劣っているか優れているか。周りが笑うか、無反応か、ほめるかで、人間は不幸やしあわせを感じるのである。つまり、周りからの視線や言動などの外的要因を、自分の心の中にどう取り込み捉えるかによって、幸不幸は決まるのである。

自分の生まれながらの身体的な特徴も、今回の東日本大震災も自然が生んだ災難である。自分の努力では、現実を理想に近づけることなど到底できない。それならば、現実を肯定して寄り添うことができればしあわせになれるのだ。つまり、考え方の問題で劣等感や不幸は消えるのである。

精神的にどん底で悩むときはもつと不幸な状況と比較して、現実を「よりました」と考え肯定的に捉えてしあわせになる。元気であまり悩みがないときは、高い目標を掲げ、努力を続けながら今をしあわせに生きる。こんな理想を掲げながら、今をしあわせに生きるために私は努力し続けた。

2年生の部

夏の庭 —The Friends—

湯本 香樹実 著

建築学科 澤田 勇志

「夏の庭—The Friends—」を読んで

—— 「死」とは何なのか ——

「死」—— それは誰しもが直面し、まぎれもなく必ず訪れるもの。私は「死」が「なれの果て」ではなく、一種の「夢」のようにとても意味のあるものだと感じた。

この物語は、木山、山下、河辺の仲良しトリオの「死んだ人を間近で見たい。」という、ある意味ふざけた始まり方をする。その死んだ人を見るために、三人はあるおじいさんに目をつける。そして、その日から

「おじいさんが死ぬまで観察しよう。」

と決め、隠れて観察をはじめた。しかし、時間がたつにつれ三人は、おじいさんと仲良くなっていく。それも対等な友人のように。そして、三人がおじいさんの家に行けなかった四日の間に、おじいさんは亡くなってしまった。

私はもう十七歳である。そのためか、お通夜やお葬式は、身内でも知人でも何度か経験したことはあるが、それはとても楽しいとかいうものではない。私の祖父や祖母の時などは、尚更楽しくなんかない。むしろ涙があふれる程、悲しみにかられる。なぜこんなに悲しいのか、正直あの頃は分からなかった。もう会えないから、もう一緒に遊んでくれないから、こんな理由ではない気がしていた。

この物語に出てくる「分からないということが一番怖いことだ。」という言葉はまさにその通りだと思った。そして、それと同時に、あのお通夜で泣いていた自分がなぜ泣いたのか分かったような気がした。

そう、私は「分からない」から泣いていたのだ。人の死をうけとめることが分からない。もう話すことができないということが分からない。そもそも、なぜ涙が出るのかも分からない。結局、分からない自分が怖くて泣いていたのだろう。

また、分からないということは、分かろうとしていると解釈することもできる。そしてそれが、数学や物理の問題であったり、テレビ番組のクイズであったりする時は分からなくても「怖い」とは思わない。なぜなら、それらには「答え」があるからだ。これがあれば、その時に分からなくても、考えたり調べたりすれば、必ず分かるのだ。

しかし、「死」や「感情」には答えがない。あえて言うならば「分からなくて当たり前」というのが答えになると私は考える。きっと納得することもできないし、正解ではないだろうけれども、分からないから仕方がないだ。この物語では、その一例として、お化けについてかいてある。お化けは怖い。いるかいらないかなどははっきり分かるわけなし、その問いに答えなどないのだろう。だから、お化けは怖いのだ。

私はこの物語を読んでみて、こう思った。「死」は必ず訪れるけれど、どうなるかは誰にも分からない。それなら「死」は「将来の夢」みたいなものだ、と。

建築士になって、人の喜んだ顔が見たい。楽しい家族をつくりたい。テニスの大会で優勝したい。このようなものはすべて夢だ。でもあくまで夢なのだ。現実にならないこともたくさんある。でもみんな、その夢を現実にするために努力をする。努力をしたら、現実になるかもしれない。ならないかもしれない。それもどうなるか分からないのだ。でも分からないから努力をするんだ。結果が分かっていたら、努力もしないし、夢を叶えようなんて思わない。どうなるか分からないから「夢」なんだ。

この世の中、分からないことだらけだと私は思う。だからこそ、おもしろい怖くなる。この物語を読んで、「死」を「夢」だと思えるようになった自分がちょっと大人になれた気がした。

3年生の部

ドキュメント
テレビは原発事故をどう伝えたのか

伊藤 守 著

電気情報工学科 作田 安希忠

所有から共有に変化しつつある情報

インターネットが普及した今、たくさんの情報が身の回りに満ち溢れている。その中でもテレビが与える情報について考えていきたい。

一昨年、東日本大震災は記憶に新しい。そのときテレビは情報をどう発信していたのかを考える。

まず、東日本大震災が起こった数日間のテレビは各局揃って震災や福島第一原発のニュースばかり放送していた。福島第一原発の事故で放射能が漏れた際、各局は国民の不安を煽ることを避け、「健康に害はない」と報道し続けてきた。この報道は本当に正しいものだったのだろうか。国民の不安を煽らないということもテレビ局にとっては大切なことなのかもしれない。しかし、国民には大変な事態が起きていて身の危険が迫っていることをきちんと報道すべきだったのではないだろうか。実際に当時、僕はインターネットでいろいろな専門家が放射能漏れに対し警鐘を鳴らしていたのを見た。「テレビの報道はおかしい」というような記事も見た。おそらく、多くの人がこれを読んで、僕のように「そうだ!」と思ったに違いない。このようなことでは、テレビの信頼が薄れてしまうのではないかと

と考える。

次に、映像やニュースなどの独占だが、福島第一原発の原子炉建屋が爆発した際の映像も最初はひとつの局が独占しており、ほかの局はその報道が遅れた。このような災害時にも情報を独占していいのだろうか。このような災害時だからこそ、他局とも情報を共有して現在の状況を人々に伝えるべきではなかったのだろうか。このようなことも信頼を失ってしまうきっかけになってしまうのではないかと考える。

現在ではツイッターなどでだれでも簡単に情報を発信していくことができる。ツイッターでは、ほかの人がツイートしたものをリツイートすると、自分が中継点となり、自分のフォロワーにも発信することができる。これは、情報を発信すると同時に共有するといえるのではないだろうか。そんなツイッターの情報がテレビに取り上げられることも最近はある。例えば、コンビニのアイスクースに入って写真を撮っていた件などがある。その他にも、NHKの「ニュースウェブ」は、番組で報じたことについてツイッターからコメントを受け付けて、視聴者からの疑問などについてコメントするというスタイルで、一方通行でない情報提供を行っている。

このように、インターネットの普及で情報は情報を所有している所が人々に一方的に伝えていたものが、双方間で情報のやりとりが出来るようになった。このような中でテレビが信頼を築いたまま生きていくためには、一方的な情報提供ではなく、視聴者からも情報をもらい、その情報を共有するという双方向的なかたちにしていく必要があるのではないだろうか。

4・5年生の部

最後の夏に見上げた空は

住本 優 著

電気情報工学科 西村 貴之

有意義に過ごすということ

「毎日を有意義に過ごしましたか」

夏休み明け等によく聞く言葉です。おそらく、似たような言葉をこれまでに聞いたことのある人は大勢いるのではないかと思います。しかし、いざ自分のこれまでの生活を振り返ってみて「私は有意義に毎日を過ごしています」と断言できる人はどれぐらいいるのでしょうか。少なくとも、私は有意義に過ごせているとは思えません。そもそも「有意義」の単語の示すことが曖昧で自分の生活が有意義かどうかと聞かれると曖昧な返答しか頭に浮かばないのです。この有意義かどうかも分からない曖昧な日々の中で『最後の夏に見上げた空は』という小説を読みました。

この作品は戦争のために遺伝子操作を施された子供たちの物語です。この子供たちは遺伝子操作により超人的な能力を引き起こすことができる兵士として利用されるため遺伝子強化兵と呼ばれます。しかし、戦争は彼らが活躍するまでもなく終結します。そして、残った彼らは特殊な薬物を投与されて超人的能力を發揮できない状態にしてから隔離施設の意味合いも持つ高い壁に囲まれた学校へと入学させられます。こうして、隔離されてはいますが学校という空間で同年代と一緒に日常を過ごすことができるようになります。しかし、遺伝子操作の影響により彼ら遺伝子強化兵は17才の夏までしか生きることができません。このような遺伝子強化兵の最後の夏の物語です。

この作品の中で遺伝子強化兵たちは17才で死ぬこ

とから苦悩したり無気力になったりします。その一方で、楽しいことや嬉しい出来事から笑顔を見せることもあります。つまり、17才で死んでしまうという事情を持っていながらも年相応の行動や反応をしていると思います。嫌なことがあれば落ち込むし、楽しいことがあれば元気になります。悩みがあれば友達に相談するし、同じ遺伝子強化兵と喧嘩することもあります。しかし、この物語に登場する遺伝子強化兵たちに共通することは、誰もが17才までの短い日々を一生懸命に生きていたことです。一生懸命生きようとしているために喧嘩したり落ち込んだり悩んだりしていたのだと思います。ところが、遺伝子強化兵は17才の夏に死んでしまいます。この結果だけ見ればとても切ない終わり方です。どれだけ毎日を一生懸命に生きたとしても結局は死んでしまうという空しさも覚えます。しかし、死んだ彼らは誰もが安らかに眠るように死んでいったとあります。17才という短い年月しか生きられずに死んでしまうとしても、死にたくないと思ってもなかつたのは、彼らが毎日を一生懸命に生きてきたからだと思います。もし、一生懸命に生きていなかったら、死にたくないと思っても暴れまわったかもしれません。まさしく、彼らは毎日を有意義に過ごした存在です。その字の示すとおりに彼らの生活に意義があったからこそ安らかな最期を迎えることができたはずで

私は既に17才の夏を過ごし終え、そして大きな病気にかかっているわけでもないのに近い将来に死ぬ予定はありません。おそらく多くの人がそうであるでしょう。そのため、自分が死ぬ時のことを考えるのは時期尚早かもしれませんが、私は泣きながら悲しい思いをして死ぬような最期を迎えたくはありません。そして、そうならないためには毎日を一生懸命生きることが必要です。一生懸命生きるといっても具体例はありません。生き方は人それぞれなので、日常を有意義にするやり方も人それぞれのはずです。私は簡単に忘れられないような日々を過ごしていくことで有意義にしたいと思います。

優 秀 賞

1年生の部

柳橋物語

山本周五郎 著

機械工学科 市川 将

強く、前向きに、生きる

—「柳橋物語」を読んで—

この本は僕にとつて初めての時代小説だった。時代小説は「固苦しい」というイメージだったが、この本はそんなイメージを払拭してくれた。

この物語は、十七歳の少女おせんの辛く悲しい生涯を描いたものだ。おせんのが好きだった「庄吉」が上方へ稼ぎに行くので、「待っているわ」と言った。しかし、この一言がおせんの生涯を左右する。庄吉が上方へ出てから、庄吉同様、おせんのが好きだった「幸太」が言い寄って来る、火事で助けた子供を「幸太との子」だと根も葉もない噂をされ、ついには庄吉にまで誤解されてしまう。これらが原因でおせんは町中で買物をしたり、町の人や庄吉への誤解を解くこともできず、記憶喪失にまで追いやられてしまう。庄吉には「子供を捨ててみる」と言われ、捨てようとするが、母性が勝り、とうとう捨てることができなかつた。結局、最後まで誤解を解くことができなかつた。

自分はおせんと同じ境遇になったことがないので、想像しかできないが、自分も同じ状況に置かれたとき、きつとおせんと同じように子供を捨てられないだろう。他人の子供とはいえ、自分が手をかけて育ててき

たのだから、我が子同然だからだ。

また、幸太が告白したことの「烈しい感動からきた精神的虚脱」となり記憶喪失になり、根も葉もない噂を立てられ、親友のおもんが死んでも、「生きよう」「あの子は幸太とおせんの子だわ」とこれからは強く生きていくのだと決心するおせんの心の強さは、今の自分にはないと感じた。自分だったら、「あの時何もできなかった」と絶対後悔すると思う。そうして、そのことを悔み続けて、自分も後を追うだろう。おせんの心の強さは少しでも見習わなければいけないと思った。

男の自分からすると、幸太の気持ちが良く分かった。好きだけれど、相手から嫌われている。そんな気持ちになったことが何度かある。だから、幸太は太事や大水になったときに常におせんの側にいて、おせんを元気づけ助けるということ、自分はおせんが好きなんだということを表現するその姿が切ないがどこか恰好良く見えた。幸太は最後にははつきり「好きだ」と言うが、「もつと早く言っておけば——」と思ってしまった。そしておせんを取り巻く人々もまた味方であったり、そうでなかったりと様々だった。しかし、おせんに優しくしてくれる人は大半が死んでしまう。自分でなくても人間誰しも味方が居ないと生きていくのが大変だと思う。だから今のうちに沢山の友達を作って、長い高専生活が自分にとつて苦にならないようにしたい。

この本を読んで思ったことは、人間変わろうと思えば変われるということだ。最初は感受性が強く、些細なことで傷付いていたおせんも、「生きよう」この強い意志が弱いおせんを強い女性へと変えてくれたからだ。しかし、自分はまた、そういった状況に出会ったことがないので、少しでもいいから弱い自分を変えていけたらと思った。

この本は今まで読んだ本の中でも一、二位を争うほど感動した。特におせんが庄吉と再会し、子供を捨てようとするが、できなかったところだ。自分より良い人に拾ってもらうのだと言いきかせ、帰ろうとするが子供が、「あーちゃんいやよ」と泣き叫ぶ。しかし、泣きたい気持ちをこらえて帰ろうとするが、それもできず、「もう捨てたりはしない」と泣くところだ。おせんの母親になるという決意も同時に含まれているからだ。

この本を是非読んでほしい。

鉄道員(ぼっぼや)

浅田 次郎 著

電気情報工学科 角中 大志

近くにあるほど見えないもの

— 「鉄道員」を読んで —

娘を亡くした日も、妻を亡くした日も、男は駅に立ち続けた。私はこの本の後ろにあったこの文章を見て迷わず選びました。

この話の主人公である佐藤乙松は幌舞駅の駅長でした。でも、四十五年続けていたこの仕事も今年で定年退職を迎えていました。その年の正月のことでした。ほとんど無人駅であるはずの駅舎に小さな女の子が忘れていった人形がありました。乙松はその女の子を知りませんでした。その日の午前零時ごろ乙松は人の気配に気づき目を覚ましました。駅長さんと呼ぶやさしい声のもとに行くと、そこには女の子の姉と名乗る女性の姿があったのでした。

私はまずこの主人公はとも真つすぐな人だなあとすごく感じました。ぶれないう気持ちを持っているという点では私は尊敬できるなと思いました。でも、仕事に熱心になりすぎていてのせいかな本当に大切なことは何かということを見失っていたのではないかと思いました。

私にも似たような体験がいくつかありました。大切なことを見失っていたという点では同じだなと思っていました。私はいつも親がいて当然、洗濯とかもやってくれて当たり前と思っていました。でも、呉高専に入学し、親から離れて寮生

活をすることになりました。それから私は、本当に支えられて生きてきたんだということを実感しました。お母さんが当たり前前にこなしていた洗濯も私がやるとそんなにキレイにならなかつたり、変なお母さんが残つたりして、自分の無力さにくらぶとしました。でも、本当に改めて親の偉大さ、大切さにも気づくことができました。

私は乙松さんのように真つすぐとは生きられていないと思いました。もっと言ってしまうと私はしていることがいつも中途半端なのではないかと思いました。思い返してみると私は昔からずつと続けているというようなものが何一つとしてないのです。だからと言ってそれをおかしいなと思つたり変えた方がいいのかと思つたこともありませんでした。今まで私は自分の人生なんだからいろいろなことをして楽しく今を生きようというくらいに思っていました。でも、今気づくとそれはただのわがままに過ぎなかったのだと感じました。楽しくするのは本当に良いことなんだと思いました。しかし、それだけ自由をするということはそれだけの責任も当然あるわけであつて、私がやっていたことは今が楽しければ良いというただのわがままだったということに気づきました。親への感謝もほどほどで自由をさせてもらったことには本当にだめだなと思いました。これからはこのことに気づけたことを糧に自分を変えたいなと思いました。でも、本当に近くにあるほど見えなくなるものって多いんだろなと思いました。どんな人でも、私くらいの年なら、親、友人、先生、地域の人、どんなことでもいいと思います。今一度考え直してみてください。きつと何か気づけると思います。

いろんな本がある中でこの本と出会ったわけですが、ここまで心に響くものとは思っていませんでした。一人でも多くの方に読んでいただきたい作品です。私の年くらいの学生ならきつと心に何か変化を起こしてくれると思います。

悼む人

天童 荒太 著

環境都市工学科 角 有紗

死を心に刻む人を知って

— 「悼む人」を読んで —

皆さんは、ニュース等で見ず知らずの人が亡くなった事をいつまでも覚えていられますか。私はその時はその人の死を悲しみ、残念に思います。しかし何日もしたらニュースの事は忘れてしまいます。でも、この本の主人公は他人の死も一生心に刻もうとします。会った事のない人の死を悼みに、現地へ足を運びます。その素晴らしい姿に自分には真似できないと思いました。

「悼む人」という話は、坂築静人という青年を中心に、性格の悪い雑誌記者がんで長く生きられない静人の母、夫を殺してしまった女性の三人の話です。静人は亡くなった人を悼み自分の心に刻むために旅をしています。その亡くなった人というのは新聞等に載っている見ず知らずの人です。静人がその人が亡くなった場所で膝をついて悼んでいる姿を快く思わない人も多いですが、感謝される事もあります。記者や女性もはじめは彼の事を理解できませんでしたが何かひかれものがあり、だんだん気持ちも変化し、静人の事をよく分かるようになっていきます。

静人は人を悼み心に刻むときに『誰に愛されていたでしょうか。誰を愛していたでしょうか。どんなことをして、人に感謝されたことがあったでしょうか。』と問

りの人に尋ねます。どんなに悪い人でも良い話が聞けるまで尋ねます。私だったら誰もから嫌われている人の良い所を見つけられるだろうかと考えてしまいました。でもどんな人でも良い所は必ずあります。それは知っています。その事を中学生のときに実感しました。普段わがままで一緒にいると少し大変な人がいました。でもすごく明るくて友達もたくさんいます。私が泣いてしまったときは大丈夫と言ってなぐさめてくれました。今でも良い友達です。そして、やんちゃな人もいました。やんちゃすぎてイライラした事もありましたが、この人は私が誰かに否定されたときにそんな事はないとかばってくれました。こんな風に私の周りには優しい人がたくさんいます。なぐさめてくれた日、かばってくれた日、そんな小さな中学時代の優しさを思い出しました。今でも良い友人だったと思っています。だから、人を見た目やその時の印象で判断してはいけないと実感できました。その人の一つの行動を三年間嫌い続けていたらそれは悲しい事なのではないかと思いました。三年間同じ学校にいたのに悪い印象しか残らなかったなんて事は嫌です。だから静人も良い所を聞いて心に刻むようにしているのだと思います。周りの人はそれをこじつけではないかと批判しますが、亡くなった人はきつと喜んでいると思います。誰からも好かれず、もしかしたら死んだ事を喜んでる人さえいるのではないかと恐れているよりは、見ず知らずの人でも、あなたは愛され、愛して感謝された人なのだと言ってくれたら、その人はそれだけで胸がいっぱいになると思います。

私はこの本を読んで、人の命の重さについて感じる事ができ、また最初の印象や周りの評価を自分のものにするのではなく、静人のようにもつと奥にある優しさなどを見つけていきたいと思いました。この本は亡くなった人を悼む人の話ですが私はもつと身近な事について教えられた気がしました。

悼む人

天童 荒太 著

建築学科 下雅意 彩加

視点の変化を味わって

— 「悼む人」を読んで —

この本は、今、命を無駄にしようとしている人、周りの人が命を失いそうになっている人にお薦めしたいです。

ひざまづき、右手を頭上に挙げ、左手を地面の上に下ろし、その両手を胸の前で合わせる、これが彼の悼み方です。

「彼」とは坂築静人という人で、全国各地で死者を哀悼しています。

では、彼が行う「悼み」とは何なのでしょう。それは、それぞれの命が誰を愛し、誰に愛されて、何をして感謝されたのか、ということを彼の胸に入れておくものです。ただ手を合わせるだけではないのです。しかも、雑誌や新聞で見た死亡事故などの死亡者、つまり赤の他人を悼みに行くのです。

この物語は命をテーマにしてあり、命について深く考えることのできるものです。哀悼の旅を続ける静人の周りの人——雑誌の記者を勤めていて、静人について取材する薪野、がんを患っている静人の母の巡子、彼氏からDVを受けていた過去を持ち、その彼をナイフで刺して殺し、四年の服役の後に出所した倅世の三人に視点が切り替わりながらストーリーが進んでいくのです。そのため、三つのストーリーが交錯してしまうという点もありますが、それぞれの主人公の隠された事実を読み取れるという点もあるので、書き方について一概に善し悪しを言う

ことは難しいです。その、良い点と悪い点を持った書き方はまるで静人の悼みに対する人々の意見のようだと感じました。人々は彼の悼みを不審に思い、批判する人も多かったのです。しかし、命を平等に扱う姿勢に肯定的な意見を持つ人もいたでしょう。読者の感じ方によって意見が二分する面白さがあると思います。

私がもし、悼む人に出会ったとしたら、悼む人がなぜ悼むのかを気にする前に、不気味に思っただけで冷たい目で見えてしまうだろうと思いました。この本の中で悼む人が死者の家族に「内々の悲しみを弄ばないで。」と言われる場面があったからです。家族を失った上に変な行為をされるなんて腹が立つし、赤の他人に自分の気持ちをわかったように慰められるようで嫌だと思えます。

ですが、自分が死んだときのことを考えるとどうでしょう。悼まれないということは自分が生前、誰も愛さず、誰にも愛されず、感謝されなかったと思われているようにも感じます。悼まれるということは死者からは望まれているのではないかと感じられました。

この話の伝えたいこと、それは、どんな命も同じ立場にあるということでしょう。私はそれ以上に重要なことは読み取れなかったのです。むしろ読み取れやしなかったのです。悼む人は自分が死者を悼んでも何かを変えてあげることができないことぐらいわかっているのです。しかし、続けるのは命を平等に扱おうとする彼なりの考えなのでしょう。命がテーマにしてあるので、命に対しての考え方によってこの本の味わい方が違ってくると思います。

物語のクライマックスに静人を取材していた薪野の身に起こる出来事、巡子がどのようになんと向き合っていくのか、倅世が静人とどこで関わり、どのように立ち直っていくのか。そして、静人が人々に受け入れられるのかどうかに目を向けながら、視点の変化を味わって読んでほしいです。また、彼の悼みに対してどう評価するのかを考えながら読んでほしいです。

2年生の部

きみはポラリス（冬の一等星）

三浦 しをん 著

機械工学科 池内 翔馬

「きみはポラリス（冬の一等星）」を読んで
—— 星を知るある男の優しさ ——

見ず知らずの者に親切にする。これは良いことであると昨今の新聞やテレビ番組で話題になったりするのである。だが、実際のところ、私は見ず知らずの人、ましてや年齢の大きく離れた人に対してこの物語の「ある人物」のように接することが出来るかと問われれば多分答えはノーである。私以外の数多くの人も私と同じ答えを出すだろう。それほどこの物語の「ある人物」は普通ではない、難しいことをしたのである。

この物語での出来事は、そもそもの発端すらもイレギュラーな状況下で起こったことであった。自動車の盗難である。盗んだ本人の文蔵はクルマを盗むだけだったのだが、後部座席に映子という小学生の女の子が寝ているとは知らず、結果的に見ればクルマごと誘拐してしまったのである。だが、文蔵は映子に優しく接し、星を教え、相談にも乗り、自分の行こうとする昏い世界には関わらないようにし、守り、元の世界に返したのである。

自分は当然誘拐されたことはない。当然誘拐したことも無い。だが、ニュースや新聞などで騒がれる、世間一般で言う誘拐犯とは意図的であろうと無かろうと暴力を振るう、殺す、犯すなど、残虐的なことをする者ばかりのように見える。だが、文蔵は違った。最初

から巻き込むつもりが無かった映子に対して申し訳ないように話している。その上、本気で脅すようなことも言わず、まるで学校の先生か何かのように映子の話に熱心に耳を傾けたり、慰めたり、時には自分の意見を述べ、助言までしている。もちろん、もし世間に知ればクルマの窃盗、結果的とはいえ誘拐を重ねている文蔵はいわゆる世間一般の言う誘拐犯とそんなに差はなく扱われるだろう。だが、繰り返すが文蔵は映子に乱暴なことはせず、むしろ守ろうとしたのである。ここの文蔵の行動には大人としての優しさが見えて、ここが映子を信頼させている部分なのだと思う。

そしてこの文蔵は冬の星のような透明さ、儂さを持ち合わせていると思った。自分の仕事についても話さず、自分の見る夢の話も早々に切り上げ、まるで自分のことを知らせまいとしているかのようであった。映子にうさぎ座を教えるとき、とても丁寧に、静かに教え、「なければ作ればいい」とさとするように言うシーンはとても印象的である。普通、世間的なイメージの誘拐犯というのは子供を嫌ったり、会話を嫌って乱暴な言い方をしたり、適当な返事をして黙らせようとするものであると思うが、文蔵はそのようなことはしない。文蔵は、まるで自分の一部を分け与えているかのように静かに、丁寧に教える。そこに私は文蔵と冬の星との近しい何かを感じるのだ。

あの星を教えている時の文蔵は誰が見ても優しい大人の男の人であったと思う。私は同じことがこの物語を読み終えた今でもできるかどうかは不安である。むしろまだまだ難しいと思う。それほどに人に親切にすることは難しいことだと思っている。だが、いつまでも子供ではなく、少しずつでも大人になっていきたい、なりたい、なろうと思う。

海と毒薬

遠藤 周作 著

電気情報工学科 栗栖 裕紀

「海と毒薬」を読んで

—— 残酷な行為の裏の人間の本質 ——

一言で言えば「良心」とか「罪の意識」などという響きの良い単語も少し見方を変えれば、人体実験などという非人道的行為の言い訳に使われる。つまり人間は誰でもこの小説のようなことを場合によってはし兼ねないという事だ。

この作品は、筆者が診察した医者が戦争末期、米軍捕虜の生体解剖事件の立会人だったというところから始まる。戦争末期と言えば毎日多数の死者や負傷者が出て、人が死ぬということ自体ごく自然のようだった。また、主人公（勝呂）が病院内で起こる「現実」を必死に受け止めていた。教授の手術ミスで死んでしまった患者を執刀医である教授のせいにはしない為に家族には「今からが山場だ」などと言って騙し、隠蔽工作を行うというシーンもあった。その上で行われた、米軍捕虜の生体解剖実験。それを終えた主人公は「良心」「罪の意識」について考える、というものである。

小説を読んでいて幾つか自分と照らし合わせて読んでみた。一つ目は主人公の同期で手術なども手慣れている戸田の態度だ。戸田は人が死んでも、「どうせ死ぬ命だったんだ」とか言っていた。自分もひどい奴だなと最初は思ったが、よく自分と比べてみるとあまり一概には言えないなと感じた。なぜかと言うと、自分も食事をする際、そこに並んでいる料理は幾つもの動物、植物を殺してできたものかと思うからだ。食卓に並ぶ牛肉だって牛を育てなければ食えない。食卓にその牛が並ぶって知っていながら育てる農家も、それを

さも当たり前のように食べている自分も戸田と一緒にはないかと思った。それがたまたま牛か人間という違いだけ。本当にそれだけの違いしかない。戸田の考え方はひどいなんて思っていた自分も結局は人間を優位に立たせているだけの戸田なんだと気付かされた。

二つ目は、戸田が主人公に生体解剖実験に参加するかどうか聞いた所だ。結局主人公は参加していたが自分ならどうかと考えてみた。自分がもし主人公の様な医者を目指す医大生なら実験に参加していたと思う。医師になりたい訳ではないので想像し難いが、非道なことをしても自分じゃないからとか、素直に自分の知らない事を知りたいとか言う理由で参加してしまうと思う。これは現実で事件が起きた時も同じだと思う。バイクとぶつかって相手を死なせたトラック運転手が「いきなりバイクが出てきたんだ」と真実を言ったとする。ではそれを信じる人が居るだろうか。「それはトラックは悪くない」と言える人が居るだろうか。「人殺しめ」とか言ってしまふかもしれない。皆、当事者になってみないと分からないのだ。だから自分も主人公になってみないとどんな行動をするか分からない。その恐ろしさを見せられた。

このように人を死なせたり、人体実験などをしてしまう人間の心理は誰にでもあるのだと思う。性格がどうだからとかは関係ない。こういう非人道的な行為に走るかは当事者になってみないと分からない。また、「良心」や「罪の意識」はこの小説を読んでどうとでも受け取れると思った。小説の中で行った人体実験も言ってみれば「国を悩ます結核を治すための一つの糸口」と解釈すればこれは「良心」ではないだろうか。そして人間の本質というものがこれではないだろうか。誰でも殺人を犯しうる心理を持っていて、誰でも違う「良心」や「罪の意識」を持っているのだと思う。本来人体実験などあってはいけない事なので、良心などの価値観の違いを理解し正し正されしていけば少しでも住み良い世界になるのではないだろうか。

エイジ

重松 清 著

電気情報工学科 佐野 智哉

「エイジ」を読んで

—— 自分の中に秘めた心 ——

この物語は、過去の自分を見直せて、今というものを考えさせられるものだった。

主人公のエイジはどこにでもいるような中学生だ。そのエイジの同級生が突然、通り魔の犯人になってしまう。それを通して学校や世の中がどのように感じ、行動するか、また、エイジ本人の考えについて、とても詳しくかいてある。主な登場人物は、主人公でバスケットボール部員であるエイジ、同級生で不良風であるが心は優しいツカちゃん、学年でいつもトップの成績をとるタモツくん、クラスではいつも陰にかくれていたが、突然通り魔になるタカやん、週刊誌の記者である、鷺沼さん、そして、エイジの家族である、両親と高校生の姉だ。

まず、僕はこの物語を中学生のころの自分や、今の自分と重ね合わせて読んだ。共通点はたくさんあった。エイジと僕は、とても似ている。勉強、部活、友達、恋、塾などいろんなことをするのが中学生だ。子供であるけれど子供ではない。大人でもあるが大人ではない。心も体も成長する中学生だからこそ、いろんなことに興味があり、間違っただけをやってしまうことがある。タカやんは、逮捕され、少年院には行かなかったものの、少年鑑別所送りになった。僕の同級生にも、鑑別所や少年院に行った人がいた。僕はその人達と一緒に学校から帰ったりもしていたが、僕とは違うなあと思うところがいくつかある。でも、それ以外は、ほとんど同じだ。もし、何か少し違ってれば僕だったかもしれないと思う。でもやはり僕とその人達は違う。同じようなことをエイジも言っている。そ

の違いを理解して生きていくことが大切だ。

次にとても共感したのは、「その気」だ。「その気」とは、何かを壊してしまうような衝動だ。これは全員にあるものなのかは分からないが、僕にはある。それは物に当たってしまう時もある、人に当たってしまうときもある。それに近い感覚で、この物語の中に、体にはチューブがつながれているが、つながれたものぜんぶ切ってしまいたい、という表現がある。今の僕は、いろんなチューブにつながれていると思う。例えば、高専生というものもあるし、野球部というものもある。中学三年のときには、受験生という太いチューブでつながれていた。受験生というチューブがほどかれたときは、すごい解放感があった。でも、自分からチューブを切ったときはどうだろう。数学の授業の時間という細いチューブがある。中学時代、そのチューブを切ったことがある。チューブが切れた瞬間、僕は体が軽くなったような気がした。しかし、時間が経って後悔したりすることもある。人生、生きていけばいろんなチューブでつながれる。それといかにうまく向き合っていくのかということところが人生の難しさなんだと再確認することができたと思っている。

そして、一番この中で学べたと思うところは、起こった出来事を他人事だと思わず、自分のことだと思い、考えるということだ。他人事だと思ったタモツくんは全く成長できない。逆に、自分と重ね合わせて考えたエイジとツカちゃんは多くのことを学べたと思う。自分のまわりで起きた過ちを繰り返さないこと、それこそ大事なことだ。

最後にこの物語は自分の中の秘めている心を見直せるものだと思う。暴れそうな心が、暴れなかったのは、エイジの家族がそっと支えてくれていたからだ。不安定な心を落ち着かせたのは、友達や記者である鷺沼さんだ。これから先、どうしてもチューブを切ってしまいたくなったりすることが、きっとある。そのときに助けてくれるのが家族であり、近くにいる友達である。助け合いがいつでも出来るように家族や友達を大切にしたいと思う。

ふたり

赤川 次郎 著

環境都市工学科 垣内 美月

「ふたり」を読んで

—— もう一人の私 ——

生きていくというのは決して容易なことではない。かといって、目の前にある現実からそれてしまう訳にもいかない。

人間誰でも「人生」という名の花を持つものである。誰だって初めは種からスタートする。種は芽が出て、時には暴風で飛ばされそうになり、時には人に踏まれそうになるが、水や太陽に助けられつぼみとなり、花が咲く。長い時を経て成長し、生きていくのだ。

そんな私たちが生きていくには、果してどうしていくべきなのだろうか。

この物語の主人公「実加」は、姉「千津子」と三歳離れている。二人の性格は対照的で、千津子はしっかり者であるのに対して、実加はだらだらした生活を送っている。

そんな二人がある朝、いつものように一緒に登校している途中であった。世の中何が起こるか分からないというのはこういう事をいうのだろう。千津子は交通事故に遭ってしまい、帰らぬ人となってしまったのだ。

当然家の中は静まり返る。そんな生活をしていたある日、実加が見知らぬ男に首を絞められそうになったのを、千津子の声により助けられた。

それ以来、実加の中には常に千津子がいて、千津子は実加の成長を助けていくのであった。

私がこの物語を読んで、最も目に焼きついたのは、千津子がこの世を去る前に実加に言った言葉だ。

「自信を持つよ。自分の生き方に。あんたの人生なのよ。しくじることを怖がらないで。あんたが自信を持っていけば、誰が笑ったって、構やしないわ。分

った？」

まるでその言葉は私に言われているようだった。心臓がドクンと鳴ったのを感じた。自信を持つ……。いつも優柔不断である私にとって、この千津子の言葉は本当に心を打たれたのだ。

どちらに似ているかと問われれば、当然私は実加だと答えるだろう。時の流れに沿って、漠然として生きていくという点で少し私は実加と自分を重ねていた。

私かもしこの物語の実加だとしよう。家族の一人が欠けるということが、残された者にとってどんなに辛いことか、心の中の千津子に、泣きながら八つ当たりすると思う。家族を失うという事実が、「自分の人生」に大きな傷を負わせることになるのだから……。その反面、心の中に姉がいてくれると思うとやはり心強く、真っ暗だった人生に光が見えてくるだろう。

逆にもし私が千津子だったらどうだろう。自分がやり残した事、こうしたら上手くいく事など、出来る限りの事は全て妹に伝えておきたい。そして知ってもらいたい。人は悩みをかかえて生きていること、それを乗り越えていくことこそが人生だということ。

この物語では、実加が成長していくに従って、千津子の声も消えていく。

そして最後、実加の、

「お姉ちゃんなんか、どこかへ行っちゃえ！」

という言葉とともに千津子の声は全く聞こえなくなった。ふと目の前の鏡にははっきり見えた千津子は本当は千津子ではなく、実加自身の顔だったのだ。今まで千津子の声だと思っていたその声は、実加自身の自ら成長しようとする声だったのではないかと私は思う。

生きていると、人は決して成功するばかりではない。むしろ、失敗する事の方が多いのではないだろうか。

私は千津子と実加に、生きていくために大切なこと、即ち生き方を学んだ。それは自信を持つということだ。

私も自分に自信が持てるよう、もう一人の私とちゃんと向き合いたい。そして最後に。みなさんに美しい花が咲くことを願って……。

しゃばけ

畠中 恵 著

環境都市工学科 宰 風助

「しゃばけ」を読んで

—— 責任とは ——

人が他人のこと、周りのことについて考える時、大体まず「自分に関係あるのか」「自分にどんな影響（主に損得）があるのか」が頭に浮かぶものだと、僕は思う。僕がそういう人間だからというものもあるが、これまで生きてきて、一般的にそうなのだと感じた。その中で『しゃばけ』を読んで思ったのは「遠くにある危険の存在を知り、それに人が巻き込まれているとわかった時自分はどうするのか」だった。

主人公、一太郎は病弱で、親に甘やかされ、お供の手代二人に子供扱いされて育ってきたが、とてもしっかりとした意志と考えを持つ青年だ。満足に外出できない毎日にいらだっていた中、ある夜に通り魔と遭遇する。その日から一太郎の住む街で次々と人が襲われていく。終盤、彼は自らが狙われていることを知り、犯人と対峙し事件を終わらせるか、家にとじこもってほとぼりがさめるのを待つかの二択を迫られる。

中学二年生まで、僕は格闘技を習っていた。一応段数も取得していたし、少しだが腕に自信があった。習い事をやめてからいくらか経ったそんな時、ちょっとしたトラブルが起きた。同じクラスの友達が気の荒いクラスメートに胸ぐらをつかまれているのを見た。補足すると、事が起きる前から僕はそばにいた。友達は中学でよそから転校してきた人で、背がけっこう小さく、みんなから軽く見られがちだった。そんな彼に口応えされたのが気に入らなかつたらしく、彼が言うてすぐに事が起きた。僕は聞いていたので、友達が言っ

た言葉が正しいことで、相手の完全な逆ギレだったのを分っていた。でも止められなかった。というより止めなかったのだ。友達が壁に押しつけられて苦しそうにしている、間に割って入ろうとしなかった。怖かった。ここで割って入れば次は自分に怒りの矛先が向くんじゃないかと思うと、行動できなかった。でも近寄って表向き仲裁らしきことはしていた。だが、それも自分のことを考えての行動でしかなかった。その時僕は、周りの人の目を気にして、仲裁に入らなかった自分が白い目で見られることを恐れた。あろうことか、自分の体裁を気にしていたのである。その後解放された友達は、何も気にしていない様子だった。「大丈夫？」と言いつつ僕は、友達から顔をそむけていた。実はもう、最初の自分への問いかけには答えが出ていた。我ながら最低の解答だと思う。これに対して一太郎は前述の二択を迫られた時、どちらを選んだのか。彼は事件の主謀者に立ち向かうことを選択したのである。僕はこれに少し驚いた。安全な家になれば、少なくとも危険な目に遭わずに済むのに。一太郎は「自分が隠れた場合、事件はすぐには終わらない。その後自分の代わりに誰かが犠牲になるかもしれないと分っていて、ひきこもってられない。」という考えだった。僕は本当に感心した。自分の身を心配するのではなく、自分が知ってしまった事実とこれからの行動に責任を持って思考する彼はすごいと思う。そしてその脅威に立ち向かう心の強さに心底あこがれた。

自分に関係あるのか？ 自分に影響があるのか？ それらはどうでもいい。問題は「知ってしまった」ことにある。知ったその瞬間から自分がする行動にどんな結果がついてくるのか分かる。分かったのなら、少しでも良い方向へ向かうよう思考し努めるのが当然だ。それが「責任を持つ」ということなのだと僕は解釈した。中二の僕は見て、知った上で責任を投げたのである。そんな自分でも、一太郎を追いかければ、少しは彼のようになれるだろうか。

陽だまりの彼女

越谷 オサム 著

建築学科 高田 侑奈

「陽だまりの彼女」を読んで

—— 運命の出会いをした時 ——

この本を読み終えた後、私は心がとても温かくなるのを感じた。そして思った。人の愛情は相手が人間であれ動物であれ必ず伝わるものなのだ。

広告代理店で営業する入社二年目の浩介は、中学時代の同級生・真緒に偶然再開する。中学時代、頭が悪くいじめられっこだった真緒。十年が経ち、きれいで賢く、キャリアウーマンになっていることに浩介はうろたえつつも、次第に真緒に惹かれていく。やがて二人は付き合い合うことになり、将来を誓い合う。しかし、真緒の両親に結婚を反対されてしまう。それを押し切って結婚した二人。最初は幸せな新婚生活だったが、徐々に真緒の体調が悪くなる。そしてある日、真緒は姿を消してしまう。真緒を探す浩介の目の前に、結婚指輪を首に下げた一匹の猫が現れる。そう。真緒は猫だったのだ。その指輪を見て浩介は真緒の生まれ変わりだと気づき、一緒に暮らしていく。

もし私が浩介の立場ならどうするだろうか。本当に大好きで、必要としている人がある日突然いなくなってしまったら。しかも後から猫として現れたら。愛する人には違いないが、人ではない。話すこともできないし、猫の寿命は短いので生まれ変わる度に悲しさを感じなければならないだろう。きっと私は絶えられない。猫は好きだけれど、少し前まで人間として生活していたものと同じものとして見られないだろう。動物

は動物だという考え方が私の中にあるからかもしれない。

そう考えると、浩介はものすごい精神力の持ち主ではないかと私は思う。姿が変わった真緒を愛し続けることもだが、中学時代のエピソードの中にも表れている。いじめられっこの真緒をかばい、クラスメイトの頭にマーガリンを塗ったこと。何度教えても勉強のできない真緒に根気強くつきあったこと。他にも浩介の勇敢な姿をたくさん見つけることができる。

だが、ここで気付く。浩介が勇敢なのは真緒という時だけなのだ。会社でも、真緒に会うまでは「お供の若手」止まりだった。高校時代も特にパツとしたことはなかった。浩介の力は真緒といることによって発揮されるようだ。

かといって、浩介ばかりが助けられている訳ではない。真緒が助けられた一番大きな出来事は、二人の本当に最初の出会い。浩介と一匹の仔猫が出会った時だろう。銀杏公園で拾い、浩介が一生懸命世話をした猫。本には書かれていないが、この猫こそが真緒であり、この時こそが運命の出会いだろう。人間となったのも浩介に恩返しをするためだったのではないだろうか。浩介が真緒の、真緒としての存在に気付く前から二人は最高のパートナーだったのだ。

運命の出会いは、男女間の話だけではない。友人、仕事…とたくさんの運命があるだろう。だが、どれが運命の出会いかなど私達にはわかりっこない。ならば、全ての出会いを大切にしたいと私は思う。もしかしたら電車で隣に座った人がそうかもしれない。道で肩がぶつかった人も有り得ないことはない。運命の出会いがいくつあるのかは知らないが、できることなら無駄にはしたくない。

人生「一期一会」だ。

ミッキーマウスの憂鬱

松岡 圭祐 著

建築学科 寺延 翼

「ミッキーマウスの憂鬱」を読んで

—— 夢と現実の共存空間 ——

私は、ディズニーが大好きだ。書店でこのタイトルを目にしたとき、手に取らずにはいられなかった。幼い頃から何度も足を運んだディズニーランドを舞台に、どのようなストーリーが展開するのだろうか、という楽しみと、もしかしたら、ミッキーマウスのあの屈託のない笑顔に隠された心の内が明かされるのではないか、という溢れんばかりの興味に胸を躍らせながら、表紙をめくった。

最初のページで、主人公の大輔はフリーターであることや、大輔がディズニーランドの採用試験を受けること、そしてそれはとにかく仕事につきたかっただけであることが分かった。自分の中で、期待の熱が下がってくるのを感じた。大輔は採用試験に合格し、美装部として働くことになる。面白半分で、ディズニーランドのバックステージを走りまわり、次々と秘密を明らかにしようとするので、私は大輔に対して半ばあきれた。ところがその反面、もっと秘密が知りたい！ という思いが生まれ、だんだん釘付けになっていく自分もいた。フィクションでありながらも、臨場感溢れるディズニーランドの夢の世界と、その地下で動くもう一つの世界とのギャップに心くすぐられる何かがあったのだ。「ディズニーランドの地下には巨大通路が迷路のように張り巡らされている」だとか、「ミッキーマウスの“中の人”は、実は女の子が多い」などといった秘密が大輔の目を通して明らかにされる。私や、ディズニー好きにとったら、「こんな秘密は噂にすぎない。」と信じてこなかったところだが、この本の中では事実なのだ。しかし、驚くのはまだ早かった。<開け放た

れた扉の向こう、倉庫のように雑然とした部屋のなか、二段になった棚に、ミッキーマウスの頭部がいくつも並んでいた>という場面が登場したのだ。頑なに守られていた、私の中での「夢の掟」がそのときぶち破られた。秘密を知らされていくうち、私の過去の思い出や、固定概念、夢、希望…様々なものが絡み合い、最大の興奮をもたらした。

私は以前、ディズニーランドで働きたいと、本気で思っていたことがある。ホームページで募集がかかっていないか毎日チェックしたり、社員になる方法をくまなく捜していた程だ。しかしそれもまた夢のように難かしい話だと知り、あきらめることにした。だからもし、この本の主人公大輔のように、簡単にディズニーランドの社員になれたとしたら、私は何の迷いもなく、その道を選んだだろう。そして、私なら仕事をしている時、大輔のように、バックステージの秘密をあばこうとするだろうか。きっとその答えはYESだ。

私がまだ幼い頃の、来園したときの記憶の中に、七人のこびと達の後ろについて歩き、自分が八人目のこびとになったつもりでバックステージの入り口を越えようとしたことがあった。その時の心境としては、おそらく自分が白雪姫と暮らせると思っていたのだろう。あいにく、母親にだっこされたことで、白雪姫の世界へ入りたかった思いは水に流されたが、見ることでできなかったその入り口の先には白雪姫と王子様、そして七人の子人がいるのだろうと、今でも思っている。もしも、私とその扉の鍵を開けるチャンス、すなわちディズニーランドの社員になり、もしも鍵を手にすることができたなら、必ず扉の向こうを見に行くだろう。たとえ、その先に、夢から覚めさせられるような世界があったとしても。

この本を読み終えたとき、私の中にあつたもの、それは紛れもなく「夢」だった。大輔によって現実をいくつも投げつけられた末の「夢」。作者の魔法にかかり、架空の、現実の世界を見た後に、この、夢のディズニーのある世界にいること、今すぐ行きたいと思ったこと。今私は、夢と現実の共存空間にいる。

ふたり

赤川 次郎 著

建築学科 吉本 菜那

「ふたり」を読んで

—— 自分の中のもう一人の自分 ——

成績優秀、背は低い、運動神経抜群の明るい姉、背は高いが、痩せていて、どこか内向的なところがある妹。そんな、対照的で仲良しの姉妹に、突然の不幸が押しかかる。思いがけぬ事故により、自慢の姉を亡くしてしまうのだ。そしてその姉が亡霊となり、妹にアドバイスをし、それにより、日常に起こる様々な問題を乗り越えながら、少しずつ成長していく物語である。死んだはずの最愛の人が、死後も、自分の中に生き続け、自分を励まし導いてくれるなんて、そんなことがあったらいいなと何気なく興味を引かれたのが、この作品である。

この物語では、ありえないくらいに不幸な出来事が多発している。姉が交通事故で亡くなる、精神的病を抱える母、父の不倫、親友の父が突然の病死、父の会社が倒産し、母子心中をはかるクラスメイト。いかにも小説だなど思いながら読んでいたが、ふと、そうでないことに気がついた。世の中で日常的に起こり、ニュースやワイドショーで取り上げられることなのではないかと。いつ自分の身近に起きてもおかしくない、現に今も、世の中のあちらこちらで起きていることの縮図ではないかと。

そして、姉の死後より聞こえてきた声、あれは姉の声ではなく、輝かしい姉の陰に隠れて、知らず知らず劣等感の中で生きていた主人公の、本当はこうでありたいと願う思いを姉という存在の力を借りて、自分に言い聞かせているのではないかと。

誰にでも必ずもう一人の自分がある。何かに迷った

時、私たちは自分の中で二つに分かれた意見に葛藤することがある。笑顔の裏に悪意に満ちた自分がいたり、ぶっきらぼうな態度の裏に善意であふれた自分がいたり。弱気なことを言いながらも自信満々、強気なことを言いながらもおじけづく。この二面性がこの物語でいう「ふたり」を意味しているのではないかと思った。

私は小五から剣道をしているのだが、試合になると、毎回緊張してしまう。勝てるような相手でも、一本も取れず終わってしまうこともあれば、なぜか冷静で負ける気がせず最後まで勝ち進むこともある。相手に押されて場外に出そうになった時、母の「さがるな。」という声が、さがってはいけないという自分の思いと重なったとき耳に飛び込んでくる。父の「大丈夫、勝てるぞ。」と叫ぶ声が、絶対勝つぞという自分の意志とつながったとき大きな力が湧いてくる。姉の声と同じである。

この本の中で、妹が姉の亡霊に向かって「お姉ちゃんなんか、どこかへ行っちゃえ。」と言うシーンがある。その時から、姉の声が聞こえなくなってしまうのだが、その場面が私の中で強く印象に残っている。それは、自分の中のもう一人の冷静な声を無視し、感情的な怒りで父親を殺そうとした主人公の心の描写だと感じた。また、主人公が成長していく過程で姉に似てくるという表現があるが、それは姉の亡霊による影響ではなく、劣等感の影で見失いかけていた主人公本来が持つ輝きを取り戻し変わっていく姿が、今まで憧れだった姉の姿に重なって見えたのだと私は思った。

二人の姉妹のほろ苦い青春ファンタジーとして読み始めたこの本が、単なる小説の中の出来事ではなく、いつしか私自身、内面に問いかけながら読み終えていた。自分の中のもう一人の自分に耳を傾けて、感情に流されず冷静に判断していかなければならないと感じた。この先私も、いろいろな壁にぶち当たるだろう。そんな時、逃げ出しそうになる自分とがんばって乗り越えようとする自分、その「ふたり」の葛藤の中で私も少しずつ輝く自分に近づいていきたい。

3年生の部

小惑星探査機はやぶさの大冒険

山根 一真 著

機械工学科 峠之内 和也

「小惑星探査機はやぶさの大冒険」を読んで

まず、初めに思ったことは素晴らしくハッピーエンドだったということだ。推進装置が壊れ、姿勢制御装置が壊れる等の数々の障害があり、挙句、完全に行方不明になっても当初目的は、ほぼ完全に達成できているのだから幸運と言えるだろう。結果だけ見た場合の話であって、裏で大勢の人が長い時間苦悩した結果であったと思う。

幸運だったのは、そのかけた労力・時間が成功という結果として報われたことだ。報われなければ、次の挑戦の時のためのいい経験だったとかいくら理由をつけようが、白々しく失敗は失敗。とても苦いものだ。

挑戦することに意義があるだとか、失敗も経験だとかよく耳にするが、JAXAの方々の挑戦を見るとそれに意味が無いように思えてきた。成功の結果のほうが失敗の経験よりも価値が高いのは、事実である。マスメディアの反応を見ると、はやぶさがサンプルリターンに成功してウーメラにカプセルが落下したことは大きく報道される一方で、小惑星イトカワからの帰路が推進装置が壊れ、姿勢制御装置が壊れた状態で、進んでいたことは、その時には大して報道されず、成功した後での報道やこの本や映画で知った人も多いと思う。

よって、挑戦することに意義があるのではなく、成功するまで失敗し続けることが重要なのだと思う。

しかし、実際に失敗し続けることは、苦痛であるし、やりがいを感じることはできない。

これの対策は、目標を低くするか、または目標を多く設け成功の回数を増やすことだ。はやぶさにもこういった多数の目標が設定してあったし、そもそも、はやぶさは工学実験探査機というのだそう。第一目標はイオンエンジンやその他に機材の運用や技術の蓄積と言った工学実験であるということだろう。

また、危機的状況を、好機と捉えるのも物事を続けるには重要な事であることも分かった。イオンエンジンの開発を担当した國中均さんは、イオンエンジンが壊れてしまった時に、

「これで、やりたかったことがやれる」と思ったそう。

國中さんは、四基のエンジンがそれぞれの生きている部分を使って運転できるようにと設計していたそう。この機能を試せるのは実際に故障が起きてしまった時だけなので、壊れてしまって残念という気持ちの他に、やっと試せるという気持ちもあったそう。

失敗のほうが圧倒的に多いであろう宇宙開発に、このような気持ちで臨めるのは技術者の心構えとしては素晴らしいことだと思うので、技術者を目指す自分も、この本に出てきたJAXAの方々のように、失敗し続けても成功するまで挫けない心や、失敗を失敗のままに終わらせないような努力をできる人間になって最終的な結果を幸運だったと振り返ることができるようになりたい。

A 3

森 達也 著

電気情報工学科 難波 佳那

「A 3」

『A 3』という本を読んだ。筆者である森達也がオウム真理教、またその教祖である麻原彰晃を様々な視点でとらえ、事件の真実の姿を追求していくという内容だ。驚いた。今さらオウムというのもあったが、テレビや新聞で見てきた彼らの姿と本を通して見る彼らの姿がまったく違っていただけだ。私の印象でいえばオウム真理教といえば気味の悪いインチキ宗教集団だ。しかし、この本では普通の一般人となんら変わらない人達だった。これらの事実をずっと伝えていた筆者は本当にすごいと思う。当時テレビや新聞などのマスメディアはどれだけオウム真理教が恐ろしいかといった見出しでいっぱいだったと聞いている。その中で一人麻原や信者の良い人といったエピソードを伝えるというのはなかなか勇気がいる行為だと思う。社会が望んでいることとは正反対のことを言う筆者は異端な存在であり、社会としては筆者は受け入れがたい存在だ。批判や抗議はさうとうのものだったのではないだろうか。

社会全体としてというのはないが、学校の中で筆者と同じように望まれないことをしたことがある。中学での話だ。授業中いつも騒がしくしているグループが

あった。自分もそうだが迷惑そうにしているクラスメート達を見て、これはどうにかしなければいけないのではないかと考えた。しかし、騒いでいるグループは当時の私にとってはとても怖い人達だったので注意することでいじめられるのではとも考えた。迷って結局言うことにした私は先生と相談し、ホームルームで注意することになった。結局注意した結果、静かにしてくれるようになった。ただ、あ那时的空気は一生忘れそうにない。先生に相談したことで大事になり、ホームルームも長引いてしまい、クラスメートからは面倒なことをしたなといった目で見られ、注意したグループからは陰口を言われるようになってしまった。今思えば自分が嫌な思いをしてこんなことをする必要はあったのか。

「たまたま僕には、見えたし聞こえたのだ。見えたのだから聞こえると言うしかない。知ったからには素知らぬ顔はできない。だって、もしも目を凝らして、耳を傾けてくれれば、きっと誰もが気づくはずだと思うのだ。」と筆者は書いている。その通りだと思った。私がその一人だから。今まで苦い思い出だった中学でのこともこの本を読んで、考え方が変わった。嫌な顔をしていた人達ばかりだったが確かにいってくれてよかったと思っていた人もいたはずだ。

望まれないことや空気を読まない発言や実行をしてはいけないという風潮がある。しかし、それは一つのものごとの見方を制限しているだけに過ぎない。反対の意見を持っているからとその意見に固執してはいけない。様々な視点からものごとを見ることで、その本質をようやく知ることができるだろう。

世界の遺児100人の夢

あしなが育英会 著

環境都市工学科 岡部 知里

「世界の遺児100人の夢」を読んで

「ウガンダではいつも一人ぼっちだった。」これは、日本人の病氣遺児が日本で行われたあしなが育英会主催の交流会でエイズで親を失くしたウガンダの子どもから聞いた言葉だ。このたった一行の言葉が私の心に残った。私よりも年の幼い子が普通は親に甘える年であるにもかかわらず、助けてくれる大人もいない中で暮らしていかなくてはならないのだ。世の中には、災害や病氣、テロ、戦争などでいつも一人ぼっちになってしまった子どもたちがたくさんいる。このような遺児たちの夢から、家族の大切さ、そして学校に普通に通って学べるということがどれだけ幸福かということを変えて考えさせられた。

具体的に遺児たちとは、どのような違いがあるかと考えた時、一番に挙げられるのは、親や兄弟、姉妹との別れだろう。特に、私は身内と死別した経験がないため、その苦しみは想像も出来ない。中には母親が生き残り、自分が死ねば良かったと言っている子もいて、どれだけ親を大事に思っていたかが伝わってきて、私も辛くなった。親が生きていてくれる、それがどんなに幸福であるかということが考えさせられた。そして、ここまで育ててくれたことに感謝しなければならなかったと感じた。

遺児たちの辛い経験も苦しい思いも文章を読むだけでは到底理解することは出来ない。しかし、遺児たちとの共通点もあった。それは、人の役に立つ仕事がしたいということだ。遺児たちのほとんどは、医者になって、自分と同じような弱い立場の人も治療も受けられるようにしたいという夢や政治家になって、弱い者を助け、自分の国を復興させたいという夢や教師に

なって教育を受けられない子どもたちが勉強出来るようにしたいという夢やあしなが育英会のように遺児たちに手を差し伸べて、助けたいという夢を持っている。これらの夢に共通しているのは、人の役に立ちたいという気持ちではないかと思った。私も中学三年生の進路を決める時、将来の夢を考えてぼんやりと浮かんできたのが、人の役に少しでも立てる仕事がしたいという気持ちだった。そのため、公益事業に携わることの出来る可能性の高い呉高専の環境都市工学科に入学したことを遺児たちの夢を読み出し、共通しているのではないかと思った。しかし、少し違う点もある。それは勉強に対する姿勢である。入学した当初は、私も専門的な勉強や実習が出来るのがうれしくて、自ら勉強していたが、今では授業で講義を聞き、黒板の内容をノートに書き写すだけの受け身の姿勢になってしまった。だが、遺児たちは勉強をしたいと望み、積極的に将来の夢を現実にするために勉強し努力している。そして、遺児たちの中には、勉強をいくらしたくても、お金がなく教育を受けられない子どももたくさんいる。そのような子たちがいる中で、将来の夢のために勉強が出来る環境が十分すぎる程整っているのに勉強をしないのは、もったいないと感じた。この環境を大切に、勉強を自ら進んですべきだと思った。また遺児の中には、日本で勉強したいという子や日本で就職して、工業の技術を身に付けたいという子もおり、将来、社会で出会った時に恥ずかしくないように勉強しておこうとも思った。

この本を読んで、親がいて面倒を見てくれるのはあたり前ではなく感謝すべきことだということと勉強に前向きに取り組もうという気持ちになり、世界はまだまだ平和ではなく、その影響として、罪のない子どもから安全な生活や、家族や自由、そして教育をうばっていることが分かった。遺児を助け、教育を受けることが出来るようにすることも災害の対策や平和な世の中を作り、遺児が増えないようにすることも世界の責任であり、世界で解決していかなければならない大きな問題だ。

ユニクロ帝国の光と影

横田 増生 著

建築学科 花谷 知紀

「ユニクロ帝国の光と影」を読んで

「ユニクロ」この言葉を日本で知らない人は、いないだろう。テレビコマーシャル、毎週土曜日の新聞に入っている広告、そして、家にはユニクロの商品。私の家もユニクロで買ったものがいくつか、いやたくさんある。それは、若者だけではなく中年のおじさんやお年寄のおじいさんまで幅広い年齢に需要がある。今週は何が安いのだろうと、消費者はワクワクしながら広告を眺めたり、店を訪れたりしている。これも企業戦略の一つだろう。

ユニクロには、以前から興味がありこの本を選んだが、この本を手にし、見たとき分厚い本だな、それも字が小さくて…と思った。しかし、読み進めていくと、どんどんすい込まれていく自分がいた。そして、柳井氏が山口県出身だということ、広島市に第一号店がオープンしたこと、広島銀行との資金調達のいざこざなどのことも身近に感じ関心度が高まった。

大企業の経営者と労働者の関係がよくわかり、自分の知らなかった世界が見えてくる。アルバイト店員が多いこと、店長が次々に辞めていくこと、なんでもマニュアルがあること、きっと本にも書けないような企業秘密もたくさんあるだろう。

ユニクロはほとんどの商品が低価格で消費者に提供されている。この商品の労働力は中国やタイなどのアジアの人たちである。外国に工場を設け、現地の人を安い賃金で過酷な労働をさせていることにより、低価格な商品が作り出されている。この状態はいつまで続くのだろうか、日本と物価が違うから、給料が安く

ても生活は成り立つ。「だからこれでいい」多くの人は口をそろえてこういう。だが、はたして本当にそうだろうか。歴史の先生が見せてくれた昔の日本の近代化を進めていたころのひたすら仕事に打ち込んでいる労働者の過酷そうな顔が頭に浮かんだ。世界遺産に登録候補になっている富岡製糸工場を…女工衰史を…

今年の夏、タイへ家族と旅行をした。中国やインドネシアへも行ったことがある。現地の空港は、とても近代的であり、都市には、大きなビルやタワー、ホテルが立ち並び日本の都会と変わらない風景だった。しかし、中心街から車で二十分も走ると、貧しい暮らしの方が目につく町がたくさんある。その人たちにとって、日本の企業がやってきてその企業の工場で働くことができるというだけで収入源になる。実際、企業に対するボイコットなどもあるだろうが生活のためと考えれば、過酷で安い賃金でも働きたいと思う人も多くいる。

日本で私は見たことがないが、中国やタイで有名なブランドショップが立ち並ぶデパートの前で、体の不自由な人や薄汚れた服を身につけた小さな子ども、老人が空き缶を置いてうつろな目をしている姿は、とても衝撃的であった。このとき、ユニクロという一企業だけでなく、世界全体の光と影が目の前にせまってきた。しかし、この光景は現実社会と、切っても切れない関係にあるということも同時に感じた。

高専三年という学年にもなり、将来、自分はどんな職に就き、どんなことで社会に貢献できるのだろうかと思うときがある。建築家として事務所を設立できるのだろうか、一企業の労働者として働くのだろうか、だれしも下積み生活はあるという、苦労は必要だと親にも言われる。しかし、改めて考えさせられたことは、人には『心がある』ということだ。経営者であっても、労働者であっても思いやりの心を持って仕事をしたい。切り捨てる心だけで成功するような非情な心を持つ人間にはなりたくないと思っている。

4・5年生の部

キケン

有川 浩 著

電気情報工学科 都田 智大

「キケン」

学園生活における最も大事なことは果たして何かと問われると、僕は「人間関係」と答えると思う。同級生のみならず、先輩や後輩、教職員などと良好な関係を結ぶことによって、学園生活は何倍も楽しくなるというのが、僕の考えだ。残念ながら人づきあいが苦手な僕は当初はその良好な関係をあまり築けていなかったが、今ではクラスメートとも打ち解けあい、学園生活を楽しめるようになった。それでも、「彼ら」を羨ましいと思えるのは「彼ら」のような学園生活を送りたかったという憧れからくるものなのだろうか。それとも……。

本書の内容については前書きのようなものが一番わかりやすいのでそのまま転載する。

某県某市、成南電気工科大学——ほどほどの都市部に所在し、ほどほどの偏差値で入学でき、理系の宿命として課題が山のように多い、ごく一般的な工科大学である。

そして、この成南大に数ある部活の一つに『機械制御研究部』があった。

略称【機研（キケン）】。

しかし、この略称が部にまつわる様々な事件から、ある種の畏怖や慄きを持って名づけられたことは、機研黄金期の在学生には広く有名だった。

機研（キケン）＝危険。

その黄金期。【機研】は正しく危険人物に率いられた危険集団であった。

成南大に入学した元山高彦と池谷悟は「成南のユナ・ボマー」こと機研部長の上野直也に誘われるがま

ま機研に入部する。そこで彼らは様々なキケンな活動をする。例えば、クラブ説明会において樽を爆発させたり、副部長の「大魔神」大神宏明の失恋を励ますべく日曜日を丸一日潰す呑み会を開いたり、地元のロボット相撲大会決勝で自爆したりするなど、無茶苦茶ながら楽しい活動をしていた。中でも圧巻なのは学園祭。機研は部の伝統でそれなりに人気のあるラーメン屋をしていたのだが、実家が小さな喫茶店を営んでいる元山の意地と機転で、総売上げが百万を超えるという快挙を達成する。

このように様々な伝説を残してきた機研だが、僕が一番好きなのはラストシーンである。この本は、元山が妻に対して、十年前の、自分が機研に所属していたころの話をするというカタチでストーリーが展開していくのだが、話を聞いていた妻が成南大の学園祭を見たいと言い出し、元山は彼女を案内することになる。様々な理由から最近の学園祭に行けなかった元山だったが、そこで、メンバーこそ違えども昔と何も変わらないラーメン屋の屋台と、楽しそうな今の機研の雰囲気を見た元山は、昔の楽しかったころを思い出すと同時に、自分の居場所ももうここにはないという事実を実感するのであった。しかし、元山が「百万越えを達成した伝説のOB」と知った部員から、準備室として教室を一つ借りており、そこがOBたちの連絡所にもなっているという話を聞く。そしてその教室へと向かった元山が見たものは、上野や大神、池谷などといった機研黄金期のメンバー達からの、黒板いっぱい書かれたメッセージであった。そして、その黒板を見た元山は、こう思った。

『俺たちは【機研】だった。【機研】は俺たちのものだった。

その時代は消えない。なくならない。思い出せばいつもそこにある。それはなくなったのではなく、宝物になった。』

人と人とのつながり、すなわち「縁」とは、いくら長い年月を経ようとも簡単には綻びたりはしない。

「今」という時間を、将来楽しかったと思えるように、もっと周りの人との交流を深めようと、そう思った。

神なき時代の神

岩田 靖夫 著

電気情報工学科 山本 悠樹

「神なき時代の神」を読んで

ここに、ある想定をしよう。私は大きな川の辺を歩いている。川は昨日の雨で水嵩が増し、川を楽しむには絶好の機会であった。突然、川の上流から少年が流されてくる。周りを見渡すが、私しかいない。さて、どう行動するか。迷わず飛び込む無謀な方、助けを呼ぶ冷静な方と様々だろうが、私の行動はこうだ。「立ち止まり、流れ行く少年を目で追いながら、見えなくなるまで何もしない。」

さて、この本は現代の「神の死んだ」世界において、神とは何かをレヴィナスの思想を元に筆者がまとめたものである。そもそも、神が死んだとはどのような状態であるか。真っ先に思いついたのはニヒリズムであり、本文においても、全てが無意味となり（ニヒリズムと思われる）人間を欲望と怒りの衝動が動かす状態とある。欲望は行動を狂わせ、人間のもつ理性が行動となることはない。だが、レヴィナスはこの暴力の時代に神を甦らせようとする。その神は他者という超越より有限から溢れ出して痕跡として、奴隷として到来するのであるという。神が他者より到来するのであれば、我々は他者に出会う必要がある。だが、他者は「不在」であり、この矛盾を飛び越えるには、自己を顧みず他者に尽くす人間性が必要となるのである。

ここで、冒頭の想定に戻ろう。なぜ私はあのような行動をとるのか。最も単純に評価するのであれば、勇気がないのである。私は人一倍人間性があると思われる。そのため、私は正しいと分かっているにもかかわらず、命を投げうってまで飛び込むこともできない。最後まで見届けるのはその責任から逃れようとするためであ

る。だが、その責任から逃れることなどできようか。どう釈明したところで、私は少年を見捨てたのである。私はまだ死にたくない。けれど、悪くも思われたいと自己の心配ばかりをしたエゴイズムで彼を殺したのである。彼は他者であり、愛であり、神であった。私は神を殺したのである。この罪はどのようにして償えばよいのであろうか。前述したのだ、神の死んだ世界には全てが無意味なのである。そのため、この罪について私が言及されることはない。だが、私には後悔と絶望が残されるのである。これが、死に至る病であることはよく知られているだろう。

なるほど、この本は私に神に対する罪の意識を教えてくださいましたのかもしれない。神は死んだ、だがそれは有限者として、存在としてではない。神とは存在のかなたであり、世界の限界を知る無限である。私は他者を回路として神の言葉を授かることが可能であるのである。それに必要となるのが跳躍である。聖書にもあるように、私は富か神か、その一方のみしか得ることはできないのであり、跳躍が一切の富を捨て神を得る行為であることは言うに及ばずである。

では、私はそうするか。これも前述した。私には跳躍する勇気がないのである。なら、私は絶望を乗り越えることができないか、いや、そうではない。人は富か神かを得ることができる。富を得ればよいのである。神がない世界では全てが許される。ニヒリズムの解決法がニヒリズムを押し進めることであったように、富を得た世界においては神とは違う何か全てに意味を与えるだろう。

だが、私はそれもしないのである。なぜか私は前述の通り、弱虫でありながらも人一倍他者のために行動したいのである。そのため、これからも私は、富と神に目配せしつつ、その場でたじたじするのである。余談ではあるが、この優柔不断な態度を人間らしさという意味を込めて「人間性」とする場合もあり、機械論的自然感においても、このような不具合こそが、人間とステッキを分ける要因であるとする認知科学的見解もあるとされる。考えることを止めてはならない。

ごまかし勉強 上・下

藤澤 伸介 著

環境都市工学科 惣中 英章

「ごまかし勉強 上・下」

近年、高専生の学力低下が叫ばれている。しかし、これは高専生に限ったことではない。これは、世界的な学習到達度調査、通称「PISA」の順位低下からもわかるように、全ての教育過程における問題である。この原因は一体何なのであろうか。

私が今回読んだ本では、その原因は『ごまかし勉強』にあるとしている。この本での『ごまかし勉強』とは、「手抜き勉強」「間に合わせの勉強」「一時しのぎの勉強」などと定義されている。例えば、試験を乗り切るために授業のノートなどから、試験に出ること（でそうなところ）を機械的に暗記し、知識の体系的な理解をしないまま試験で点数をとり、見かけだけの学力を保持するような勉強のことだ。

このような勉強ばかりやっていると、見かけ上試験の点はよく、勉強ができているように見える。しかし、この勉強方法ではやっていることが機械的暗記のみのため、特に意味も分かっておらず、試験が終わったあとにきれいさっぱり忘れてしまう。これでは学んだ知識を何一つ現実問題に活かさないではないか。しかも、学生側は「これが本来の勉強だ」と思っているからたちが悪い。

高専生は企業から、高校生に比べ、早くから実習や専門的な講義などを通して実務的な知識を学び、実務

に強いというイメージを持たれている（インターンシップ先の企業の方から伺った）。このように、「実務に役立つ知識」を求められているはずの高専生であれば、なおさらこの『ごまかし勉強』は意味が無い。最近の高専の就職が厳しいといわれているのも、企業が高専生に対して持っているイメージと、実際に入社してきた高専生とのギャップに失望しているからではないだろうか。

勉強とは本来、自分が将来に役立てたり、自分の知的好奇心をみたすためにするものであり、決して先生目の目（試験）をごまかすためにするものではないと、私は思っている。暗記しては試験のあと全てを忘れ、暗記しては試験のあと全てを忘れ、の繰り返しでは何も身につかないし、何より楽しくないのではないかと。

私が呉高専に入学した当時は最真面目に見ても成績がいいとは言えず、留年しないために何とか試験の点をとろうと四苦八苦して暗記し、その度に「何故こんな勉強をしているのだろう」と勉強が嫌いになるという悪循環を繰り返していた。しかしある時から、暗記をあまり意識せずに、この授業は何が面白いのかをさがすようなことをするように心がけてみた。すると、勉強があまり苦にならなくなり、半年くらいたった頃からは成績も上がり始めたのだ。

苦しい思いをしないようにして勉強し、それでよい成績がとれるのであれば、それに越したことはない。私の経験はあくまでも一例であり、これが万人に共通するわけではないが、少なくとも今の暗記のみを重視するような勉強方法は考え直したほうがいいのではないかと思う。これが誰かの目にとまり、その人の「勉強観」を少しでも変えることができたのなら幸いである。

平成25年度 校内読書感想文コンクール 講評

一年読書感想文 講評

人文社会系分野 外村彰

今年度の一年生の皆さんは全体に明るく、また授業にも集中してとり組んでいました。夏季休暇中の宿題だった読書感想文も、ほぼ全員が期日を守れていましたし、読み応えのある内容のものが多かったと思います。

今年度から、それまでの芥川・直木賞受賞作のほかに、芥川龍之介、それから山本周五郎の推薦作をリストの中に加えました。なぜか、芥川の「鼻」——おそらくもっとも推薦作のうち枚数が少ない小説——を選んだ人が多く、いささか解せないところもあったのですが、「地獄変」「河童」などを積極的に読み解こうという人が多かったのには感心しました。

最優秀作は、各クラスの代表となる優秀作六篇から（署名は伏せて）皆さんに選んでもらいました。四クラスのうち二クラスずつで、得票数がトップだった二篇を最優秀作にした次第です。選ばれた学生さん達、おめでとうございます。

読書感想文は嫌いだ。そう言って憚らない人がいます。読後のもやもやした思いをかたちに表わせられないから、いやになるのでしょう。反省してほしい。それは表現力が未熟だからなのです。

読書感想文に限らず、よい文章は感動から生まれます。感想文なら、何より感動した作を選び、なぜ感動したのかを多角的に見つめ直しましょう。たとえばもし自分が主人公の立場だったら、と仮定するように。

感動は自己発見です。だから文章を書くことは、自己を知る作業。そう考えて、精進を怠らぬようにしたいものです。

二年読書感想文 講評

人文社会系分野 岩城裕之

2年生は課題図書をこちらで設定して、それを読んで感想文を書いてもらう、という形で実施しました。長い人生ではありますが、いろいろと「ものを思う」ことの多い今の時期に、ちょっと立ち止まって、「愛」だとか「生きる意味」だとか「世の中の矛盾や世の中の光」だとか、忙しく生きていると考えることのないようなことを考えてもらおう、という目的で選んだ本でした。今回のコンクールはきっかけ、でした。

感想文を読ませていただき、私の予想以上に、皆さんがきちんとものごとを考えたことが伝わりました。入選作を選びはしましたが、選ぶのに苦労しました。レベルは低くなかったと思います。また、「愛すること」や「生と死」についてふれられた作品が多かったように思います。

読書は人生のおやつ、です。なくてもいいけれど、あっても邪魔ではないもの。ぜひこれからも、たまには本を開いてみてください。

三年読書感想文 講評

人文社会系分野 木原滋哉

3年生の課題は、ノンフィクションや評論を自分で選んで感想文を書くことでした。自分では体験できないことが描かれていても自分の問題として取り組み、さらに現代社会の大きな変動を読みとった感想文を評価して、優秀賞と最優秀賞を選出しました。オウム真理教問題から学校内の出来事を再考した「A3」(E3 難波君)、世界の遺児と自分との違いだけではなく共通点に着目した「世界の遺児100人の夢を読んで」(C3 岡部さん)、アパレル産業から世界との関係に目を向けた「ユニクロ帝国の光と影を読んで」(A3 花谷君)、探査機の経験から技術者の心構えを学んだ「小惑星探査機はやぶさの大冒険を読んで」(M3 峠之内君)、原発事故報道から情報社会の今後を展望した「所有から共有に変化しつつある情報」(E3 作田君)を選出しました。

四・五年読書感想文 講評

自然科学系分野 笠井聖二

まず、4年生以上の応募が少ないのが残念です。1～3年は、授業の課題となっていますが、4年生以上は自由応募となっています。「本を読む」、「文章を書く」ということは、専門分野に関係なく基本的な行為ですので、積極的に応募してもらいたいと思います。

少ない応募でしたが、どれも一定の水準以上でした。ただ、文章としては良くかけていますが、本の内容に関する記述が不足するものが見受けられました。読書感想文ですから、単に自分の意見・考えを述べるだけではなく、内容に触れながら意見・考えを述べてもらいたいと思います。

行事報告 平成25年度第2回ブックハンティング

学生会 文化環境副委員長

堀 雄貴

今年度の第2回目のブックハンティングが、11月25日（月）に開催されました。当日は後期中間試験の最終日ということもあり、参加してくれた1～3年生の委員から疲れが感じられましたが、大きな問題もなく開催することができました。

1人1万円という予算の中で自分の読みたいものや、今後役に立ちそうなものを選び買いました。普通の人は見向きもしないような専門書を選ぶ学生の姿もありました。自分も何冊か専門書を買ったのですが、一冊が結構高価なので1万円という予算でも少ないように感じられました。来年度もぜひ楽しみにしてほしいと思います。

なお、ブックハンティングに必要な経費は後援会から支援いただいています。ありがとうございました。



ブックハンティング図書紹介

機械系公式集

N. N.

この本には機械科ならば絶対に一度は使うような公式がまとめてあり、勉強するときに便利なんじゃないかと思い選びました。

ロボット工学（機械工学入門講座）

S. G.

この本はロボットの代表的な機構の仕組みがとても詳しく書いてありとても参考になります。又、その他にも、運動伝達を行うのに必要なプーリーやベルト、カムの仕組み、対偶についても詳しく書いてあり、本の題名でもあるロボットについても書いてあるため、もはや機構学とロボット工学の本が一緒になっている感じだったので、選びました。

世界史の中の日露戦争（戦争の日本史）

O. R.

僕がこの本を選んだ理由は、教科書で日露戦争のためにさかれている紙面があまりにも少ないからです。日露戦争とは、勝ち負けの結果によっては日本の将来を左右したほどの大きな戦争であります。ですからこの戦争をもっと知ってもらいたいと思い、この本を選びました。

数学ガール（数学ガールシリーズ 1）

I. S.

古本屋で数学ガールのまんが版を少し見て、面白そうだと思い、本屋に行ってみてみたら、値段が高かったので今回ここで買いました。内容は数学のことが多い小説といった感じです。

ロスジェネの逆襲

I. K.

選んだ理由は、友達が希望したのもあるが、ドラマ「半沢直樹」を見て主人公の半沢の出向後の物語が気になったのでこれを選んだ。半沢が悪事を働いている銀行の幹部達に「倍返しだ！」と言って時代劇のように悪を斬る場面が見所です。

記憶力がグングン伸びる驚異の脳活力 (YELL books)

K. T.

この本は、勉強や社会で役立つ記憶力の驚異的な伸ばし方について書かれています。この本を読んで試験前や職場での頼まれごとなど記憶力が必要とされる現代社会に対応できるような脳活力をつけてみませんか？

考え方・進め方 建築耐震・設備耐震

Y. S.

地震は日本から切り離せない物であるので日本の課題である耐震にしました。

すごい宇宙講義

S. T.

僕がこの本を紹介したのは「宇宙」というジャンルに着かれたからです。ブラックホール、ビッグバン、暗黒物質、素粒子。これらのことが分かりやすく面白く書かれています。興味がある人は是非読んでみてください。

「無限と連続」の数学—微分積分学の基礎理論案内

O. R.

工業において、とても重要な微分積分などの基礎となるのが無限や連続です。しかし、無限や連続を理解するのは難しいことです。それらを分かりやすく説明してあるのでこの本を選びました。

村上海賊の娘 上巻・下巻

Y. M.

村上水軍は地元で有名なので、すごく気になった。

若様組まいる (100周年書き下ろし)

M. Y.

舞台は明治・大正。元武家の若様たちで結成された「若様組」が江戸の町の謎を解き明かしていきます。

the ARCHITECT says**-建築家から学ぶ創造を磨く言葉たち**

U. Y.

有名な建築家 (F. ロイド・ライトなど) の名言

で、覚えてたら使えるかもしれないし、設計についてすごく参考になりそうだったし、建築家がどんな人で、どんな事に着目して設計をしたのかが分かり、勉強になると思った。

サクッとわかる木造のつくり方

F. K.

自分は、もともと木造の住宅に興味があったので、ここまで詳細に書かれた本があることに感動しました。ザックリ見た感じでは、主に大工の仕事(作業)が書かれていたので、建築家とは少しはなれてしましますが、私の父が大工なので、それを知る意味で、とても役立つ本だと思います。

自殺予防学 (新潮選書)

N. K.

高専生の自殺率は普通科高校よりずっと高いと聞きます。幸いなことに私の周りには自殺した人はいませんが、確率的に言うならばそう低いものでもないようです。この本では「自殺とは」という定義から始まり、動機、心理、その前兆から周囲の人々がどうするかまできっちり丁寧と丁寧に書かれています。また、自殺まではいかずとも「辛い」「苦しい」といった気持ちをどうすればいいかも書いてあります。きっといつか役に立つので、自殺という単語に惑わされず、ぜひ一度読んでみてください。

日本一わかりやすい保守の本-KAZUYA CHANNEL

N. T.

この本の著者は、ニコニコ動画の経済のランキング上位を取り続けている KAZUYA さんです。ほぼ毎日上げている動画のように、この本も非常にわかりやすく、最近のニュースや現在の日本の問題等の解説がされています。

言語処理のための機械学習入門

F. Y.

現在、機械を用いた言語処理を用いられることが多くなっている。これからこの分野は発達していくだろうものであり、基礎的な考え方を学ぶことができる。

永遠の0 (講談社文庫)

M. S.

この本は、自分で買って読んだのですが、是非ともたくさんの人に読んでもらいたいと思い、今回選びました。天才飛行機乗りでありながら、海軍一の臆病者だった久蔵の、命の考え方に感銘を受けました。

読書のすすめ

私の人生を決めた一冊の本との出会い

機械工学分野 國安 美子

人生を左右するような本に出会ったことがある、という人はいらっしゃいますか。私はその中の一人です。昔から進む道に迷った、したいものが見つからない、といった時はとりあえず本屋に行ってみます。そんな私が教員になるきっかけとなった本との出会いについて記してみたいと思います。

大学院時代より、女性が結婚・出産をしてもなお働き続けるにはどうしたら良いだろう、と悩んでいました。ところが、周りに相談できる女性の研究者はおらず、そうした時期に出会ったのが、日本経済新聞出版社の「科学者の奇妙な日常」という一冊でした。この本は、タイトル通り科学者（研究者）の日常について紹介されているのですが、その著者がほかならぬ女性研究者なのです。本の中には、一

般的な研究者のワーク（仕事）についても書かれてありますが、一児の母として子育てをしながら大学の研究室を運営する、といったワーク・ライフ・バランスも紹介しているのです。リアルであるが故に、様々な問題とその解決についても記載させており、私も教員になろうとその時感じました。

本の中の主人公は、私たちより前に人生を経験しており、それがどうだったか、どうしたら良いかを知っている、いわゆる人生の先輩なのです。本はテレビと違って、入ってくる情報に対して十分考える時間を持つ情報源です。内容がすべて正しいとは限りませんが、情報を取り入れるか入れないかをその場で考えることができるというのが大きな特徴ではないでしょうか。若いみなさんはこれからの人生で何度岐路に直面するかはわかりませんが、そうした時に人に話を聞くのも良いし、パソコンや携帯で情報を調べるのも良いですが、是非たくさんの本を読んでみてください。そこに答えがあることを願っています。



【表紙】大谷川で佇む水鳥

この鳥の名前は知りませんが、高専の近所でたまに遭遇するこの鳥は、思いの外すぐに飛び立ちます。今思えば、もし自分が焦ってこの鳥を「撮ろう」としていたら、この鳥がここに「写ること」は、無かったかもしれないです。

(撮影：呉高専機械工学科 5年 高倉 諒)

お知らせ

貸出回数上位ベスト10

(調査対象期間:平成25年4月1日～平成25年9月30日)

順位	題名	著者
※ 1	編入数学徹底研究:大学編入試験対策	桜井基晴
2	TOEICテスト新公式問題集Vol. 5	Educational Testing Service
3	上:詳解電気回路演習	大下眞次郎
3	英単語、これだけ(1日1分レッスン! TOEIC test)	中村澄子
5	TOEICテスト新公式問題集Vol. 4	Educational Testing Service
5	1;基礎物理学演習	佐野元昭、田中秀数、山本郁夫
5	2;基礎物理学演習	佐野元昭、田中秀数、山本郁夫
5	生命の星・エウロパ	長沼毅
5	新TOEIC TEST英文法出るとこだけ!	小石裕子
5	2012年版;電験三種完全解答	オーム社編
5	ラプラス変換法による過渡現象計算	徳田精、木村伊一
12	TOEICテスト新公式問題集Vol. 1	Educational Testing Service
12	機械力学演習	末岡淳男[ほか]

DVD利用回数ランキング

(調査対象期間:平成25年4月1日～平成25年9月30日)

順位	題名
※ 1	いまを生きる
2	カラーパープル
2	感染列島
2	60セカンズ
2	ザ・マジックアワー スタンダード・エディション
2	ショーシャンクの空に
2	デイ・アフター・トゥモロー
8	トランスポーター
8	バッドマン・ビギンズ
8	プロジェクトX II-3ツッパリ生徒と泣き虫先生
8	もののけ姫
8	ワイルド・スピード

編集後記

図書だより第56号をお届けします。

今回は読書感想文特集です。初の試みとして読書感想文に関する講評を選考委員の先生にしてもらいましたので参考にしてください。

最後に、今号の発刊にあたりご多忙にも関わらず原稿を執筆していただきました方々にお礼申し上げます。